乳糜尿ニ就テ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30708

乳糜尿ニ就テ

金澤醫學專門學校皮膚科教室(主任土肥博士)

田中英香

緒論

乳糜尿トハ乳糜ヲ混ゼル尿ニシテ脂肪ヲ尿中ニ含有セル脂肪尿 Lipurie od. Adiposurie トハ自ラ別種ノモノナリ。

脂肪尿トハ例之、大量ノ油劑ヲ攝取シ、生理的ニハ急性酸化炭素中毒、又ハ燐中毒、「アルコホル中毒、癌、肉腫等ニヨル「マラスムス」ニ陷リシ場合、骨析「リベミー」ノ場合等ニ見ラル。

之等ノ場合ニハ、脂肪極微細ノ顆粒トナリテ尿中ニ混ジ、靜置ニヨリ通例、上層ニ浮上ス。反之、乳糜尿ハ單ニ脂肪ノミナラズ比較的大量ノ蛋白ヲ含有シ、脂肪層ヲ析出スルコトナシ。

乳糜尿 Chylurie ハ之ヲ寄生性(熱帶性)及ビ、非寄生性(歐洲性)乳糜尿 parasitäre—und nicht parasitäre Chylurie (Chylluria tropica, Chylluria nostras) トニ分タル。

乳糜尿ノ發生。 或ル機械的ノ原因ニヨリ腰部或ハ骨盤腔内ノ淋巴管鬱積ヲ起シ、次デ淋巴管ノ破裂ヲ起シ、遂ニ乳糜ト尿ト混合スルニ因ルト云ヒ、又腎臓ヲ通ジテ、血液中ヨリ脂肪ト蛋白トガ排出サルト云ヒ、又一方ニハ重症結核患者ニ於テ腎、膀胱ノ淋巴管ニ異常ナクシテ來ルアリ。若クハ「マラスムス」ニヨリ來ルコトアリトノ諸説アリ。次ニ少シク寄生性乳糜尿ニ就テ述ベムトス。

寄生性乳糜尿ノ原因。 バンクロフト氏絲狀蟲 Filaria Bancrofti ニ基因シ、「フィラリヤ幼蟲ハ、一八六六年ウヘ—

レル氏ハブラジルニ於テ初メテ尿中ニ發見シ、一八七〇年レウィス氏ハカルカッタニ於テ、足、陰囊ノ象皮病患者ノ淋巴液及ビ、血液乳糜尿患者ノ血液中ニ幼蟲ヲ發見シ、次デ同氏ハ一八七二年「フィラリヤ」ノ常居ハ血液ナルヲ知リ、Filaria sanguinis hominis ト命名シ、其後、一八七六年初メテバンクロフト氏濠州クインスランドニ於テ母蟲ヲ血液中ニ發見セリ。依テコノ名アリ。「フィラリヤ、ザングイニス、ホミニス」ヲ性狀ニヨリ分チテ、

一、晝現性フィラリヤ、Filaria sanguinis hominis diurna.

二、夜現性フィラリヤ、〃 〃 〃 nocturna.

三、常現性フィラリヤ、〃 〃 〃 perstans. トシ

Filaria sanguinis hominis nocturna ハバンクロフト氏絲狀蟲ノ幼蟲ナリ。(Manson 氏)

バンクロフト氏絲狀蟲ノ性狀。雌蟲ハ長サ、八五—九五 m.m.、巾、人頭髮大ニシテ、頭部稍々圓形ニテ無齒ノ口ヲ有シ、消化管ハ口ヨリ尾尖ニ至リ、生殖門ハ頭部ノ附近ニアリ。雄蟲ハ雌蟲ヨリ短ク、且ツ細クシテ、長サ、四四 m.m.、尾端强ク卷ケリ。幼蟲ハ透明平滑ニシテ頭部圓形ニテ尾端尖レリ。血液、尿、其他組織中ニ見ラレ、其ノ數ハ、一標本ニ漸ク一ツヲ見、又身體中ニハ萬ヲ以テ數ヘ、マッケンヂー氏ハ、三六—四〇萬ヲ數ヘタリ。幼蟲ハ直チニ人體內ニテ成熟スルコトナク、中間宿主體內ニ於テ生長シ、人體ニ移行シテ成蟲トナル。卽チ、中間宿主ハ「モスクィト」「クーレックス」ノ刺蚊族ニシテショイベ氏ハ「モスクィト」ノ雌蟲ガ「フィラリヤ」患者ノ血液ト共ニ幼蟲ヲ胃中ニ吸入シ、胃中ニ於テ一部ハ消化サレ、一部ハ胃壁ヨリ筋肉內ニ入リ、種々ノ異形ヲ經テ、再ビ人體穿刺ニヨリ人體內ニ移行スト云ヘリ。マンソン氏ハ「モスクィト」ノ腸管內ニ發育スルコトヲ述ベ、アショッフ氏ハ血液中ノ幼蟲ハ吸吮ニヨリ蚊ノ腸管內ニ入リ、被膜ヨリ出デ腸壁ヲ穿チテ腸管壁及ビ胸廓ノ筋肉內ニ生棲シ、此處ニ著明ノ發育ヲ遂ゲ、蚊ノ體腔ニ出デ、食道ニ於テ完全ナル幼蟲トナルト云ヘリ。性狀ノ特異トスルハ夜間ニ於ケル表在血管出現性ナリトス。コノ原因ニ關シテハ諸說紛々トシテ歸一スル所ナシト雖モ、從來行ハレタル諸家ノ說ヲ大別スレバ次ノ如キヲ得ムカ。

一、理學的原因說。　田中氏ハ太陽光線ニ關スト云ヒ、又暗室ニ於テモ起シ得トセリ。ラーデンカルド氏ハ血壓說ヲ、リンストフ氏ハ血管說ヲ唱ヘタリシガ、マンソン氏ハ幼蟲ノ大サト血管腔トノ關係ニヨルモノトセバ、晝夜共ニ出現スル常現性フィラリヤ」及ビ、デマルクヒ氏フィラリヤ」(Filaria Demarquii)ハ大サニ於テバンクロフト氏絲狀蟲ニ比シ、遙カニ小ナルヲ以テ、其ノ通過ノ容易ナルベキハ想像サレウレドモ、其ノ型態及ビ構造ニ於テ、全然同一ナル夜現性フィラリヤ」及ビ晝現性フィラリヤ」ガ何故、一ツハ夜間ニ、一ツハ晝間ニ皮膚血行中ニ出現スルヤヲ說明スル能ハズト云ヒ。ショイベ氏ハ運動說、カルテル氏ハ乳糜說ヲ唱ヘタリ。何レモ餘リ顧ミラレザルガ如シ。

二、化學的原因說。　マイエル氏及ビホワイト氏ノ酸素說、マンソン氏ノ新陳代謝產物說、ペネール、ロース兩氏ノ鞘囊說、山田、山本兩氏ノ炭酸說、吾河氏新陳代謝說、木村氏肺臟說等アレドモ、現今、後三者ニ贊同者多ク、其ノ根據トスル處ハ晝間、夜間ニ於ケル血液ノ炭酸及ビ酸素、脂肪、糖、還元物質、「アルカリ度、總窒素量、鹽類、「ヱンチューム」等ノ定量的變化ニ基因スルトノ說ニシテ攻究ノ餘地アルモノトス。左ニ本說ノ大要ヲ記スレバ、大正五年、山田、山本兩氏ハ剖檢上幼蟲ガ肺臟內ニ最多ニ存スル事實ト、肺臟內炭酸瓦斯、及ビ、酸素量トノ間ニ何等カノ關係ナキヤノ考ヘノ下ニ行ヘル實驗ノ結果、「フィラリヤ幼蟲ハ酸素中ヨリモ炭酸瓦斯中ニ長ク生存スルノ事實ヲ確メ、依テ更ニ一步ヲ進メテ患者皮膚血管內ノ炭酸瓦斯量ガ夜間ニ增加スルコトナキヤヲ確定セムトセシガ、患者ノ辭去ニ遇ヒテ目的ヲ達スル能ハザリキ。次デ大正七年吾河氏ハ前兩氏ト同樣ノ試驗ノ結果、同樣ノ結果ニ到達セルト同時ニ、高溫中ニ於テヨリモ比較的低溫中ニ於テ生存期間長キヲ知レリ。依テ炭酸瓦斯中ニ於テ生存スルハ低溫中ニ於テ生存スルト同意義ニシテ炭酸瓦斯、及ビ低溫中ニテハ、生活機能、緩慢ニテ恰モ動物ノ冬眠ト同一狀態ニアル爲メニ一定養液內ニテ酸素、又ハ高溫中ニアルヨリモ、長期間生存シ得ルヲ說明スルノミニテ、炭酸瓦斯ト幼蟲トノ特殊關係トイフコト能ハズト云ヒ、又木村氏ハ肺組織ハ他組織ト造構異ナリ、化學的理學的ニ幼蟲ノ占居ヲ促シテ、晝間ハ遊離スルコト少ナク、夜間ハ呼吸睡眠ノ如キ變化アルニヨリテ、他ノ臟器トノ差異少ナク、依テ

仔蟲ガ必ズシモ肺臓内ニ存スル必要ナキニ至ルニ非ザルカト。然レドモ之ノ説ヲ以テセバ晝間睡眠時ト雖モ、表在血管中ニ出現スベキニ、コノコトナキヲ説明スル能ハズ。

三、生物學的説。　武内、原口兩氏ノ説ニシテ「フィラリヤ母蟲及ビ仔蟲ハ晝夜ヲ鑑別スル能力ヲ有シ、母蟲ハ好ムデ夜間ニ仔蟲ヲ生ミ、仔蟲ハ蚊ノ習性ニ適シ夜間ニ表在血管ニ集ルト。コハ不可思議ナル定期性表在血管出現性ノ説明ニ極メテ便利ナル説ナリ。

人體内分布狀態。　剖檢例ノ報告少ナク、マンソン、チーマン、林氏ニヨレバ幼蟲ハ剖檢上肺ニ最多ニシテ心臓血液、大血管血液ニ多ク、脾、骨髓ニ最モ少シ。該幼蟲ハ全身ニ於テ見ルヲ得レドモ、構造複雜セル組織程、多數ニ含有セラレ、血量ニ約比例ス。然シ、血管ニ富ム、脾、骨髓ニ少ナキハ説明ニ苦シメドモ、恐ラク、容易ニ之等ノ組織内ヲ通過シ去ルニ因ルナラムト。

最モ多ク淋巴管系統ニ生息シ、殊ニ母蟲ハ大淋巴管、及ビ血液中ニ居住シ、其ノ部淋巴管擴張ヲ起シ、精系、陰囊、淋巴管腫性皮膚組織等ノ淋巴管壁肥厚ニヨリ、又ハ「フィラリヤ」自己ノ栓塞的作用ニヨリテ淋巴鬱積シ、象皮病ヲ起スコトアリトセラル。

「フィラリヤ」ニヨル疾病。　乳糜尿、象皮病、陰囊乳糜腫、靜脈瘤、鼠蹊腺腫、乳糜腹水、睾丸炎、臀部、腰部ニ來ル膿瘍、「クサフルヒ」等ナレドモ、亦健康ノ外觀ヲ有スル人ニシテ血液中ニ「フィラリヤ」ヲ有スル者アリ。之「フィラリヤ携帶者ナリ。中ニモ乳糜尿、象皮病ハ主タルモノニシテ、象皮病ニ就テハ多數ノ議論アリ。マンソン氏ハ「フィラリヤ」ヲ以テ原因ナリトシ、ロース氏ハ象皮病ノ大多數ハ「フィラリヤ」患者ナリトシ、吉永氏ハ、四〇〇〇人ノ象皮病患者中、只三名ニノミ、「フィラリヤ」ヲ證明シ、曰ク原因ノ一タリ得レドモ、本邦象皮病ノ殆ド凡テハ丹毒樣發作ヲ伴ヘルモノニシテ、「フィラリヤ」ハ、之等ノ起炎物質ヲ有セズト云ヒ、其後一種ノ球菌ヲ以テ原因體トセリ。

又同氏ト德永兩氏ハ熊本縣下、天草島ニ於テハ象皮病ヲ有スル者ニ一七・九％ニ於テ「フィラリヤ」ヲ證明シ、丹毒樣

發作時ニ、常ニ連鎖狀球菌ヲ證明シ、間歇時ニ證明セズ。依テ「フィラリヤ」ハ素因ヲ與フレドモ、原因的關係ヲ有セズト云ヘリ。又ショイペ氏ハ丹毒樣發作ハ象皮病以外ノ「フィラリヤ症ニモ來ルト云ヘリ。藤井氏ハ沖繩縣下ニ於テ住民ノ〇・三一六%ハ象皮病ヲ有シ、一・八二%ハ「フィラリヤ患者ナリト云ヒ。望月氏ハ九州南部、沖繩縣下ニ於テ象皮病四二名中「フィラリヤ」ヲ六名(一四・三%)ニ證明セリ。

寄生性乳糜尿ノ發生。　前述ノ如ク、本症ハ非寄生性乳糜尿ニ對スルモノニシテ、バンクロフト氏絲狀蟲ニ基因シ「フィラリヤ症ノ一症狀タルナリ。

本症ハ熱帶、亞熱帶ニ多クシテ、支那、蘭領印度、アフリカ、中央アメリカニ多ク我國ニテハ大正二年陸軍省ノ調査ニヨレバ北海道ノ外、全國ニ存在シ、殊ニ臺灣、琉球、九州、四國ノ溫暖地方ニ多キハ中間宿主タル蚊ノ生活ニ適セルニ基因シ、又屢々東京、福井、群馬、山形、新潟地方ニ見ラル。

「フィラリヤ」絲狀蟲ノ生息ニヨリ淋巴管ニ機械的ニ作用シテ、淋巴鬱積、管壁肥厚、及ビ擴張ヲ起シ、側枝吻合ニヨリ淋巴ノ輸送ニ堪ヘザルニ至リテ、遂ニ破レテ尿路ノ何レカノ部分ニ於テ尿中ニ排泄サルルナリ。之レ乳糜尿ノ間歇的ニ來ル所以ナリ。

而シテ擴張セル淋巴管ノ壓迫ニヨリ、靜脈鬱積、又ハ血塞ヲ起シ、遂ニ破裂スルコトアリ(ハーベルブルグ氏)。斯ル出血ガ泌尿器ニ起リタル時、血液乳糜尿ヲ起スナリ。又一度、淋巴管ニ入レル血液ガ乳糜ト共ニ尿路ニ排泄サルルコト可能ニシテ、ショイペ氏ハ血液ノ淋巴管ニ入ルハ淋巴管及ビ血管ガ同時ニ破裂スル時、及ビ兩者間ノ障壁ガ消失スル時ニ起ルト云ヘリ。而シテ、乳糜ト尿トハ何レノ部ニ於テ混ズルヤニ就テハ諸家ノ說一致セズ、之レ剖檢例少ナキト事實ニ於テ證明シ難キニヨレドモ、從來報告セラレタル例ヲ見ルニ、ヂッキンソン、ジーグムンド、グリム、ハーベルブルグ、ホッペザイエル、ショイペ、クルヘル氏等ハ腎盂、輸尿管、膀胱ニ於テ尿ニ混ズト云ヒ、エッゲル氏ハ絲毬體ヨリ排泄サルト云ヒ、村田氏ハ剖檢ノ結果ヨリ腎ニ於テスト云ヒ、田中氏ハ細尿管ニ於テスト說キ、林氏ハ剖檢ノ

結果、淋巴管擴大セル解剖的部位ヨリ考フルトキハ泌尿器ハ何レノ部ニテモ起シ得レドモ、腎ニ最多ナルベク、膀胱之レニ次グト述ベタリ。而シテ解剖上、腎ヲ以テ混入部トナセル者ニ、村田、榊氏、臨牀上ヨリセル者ニ、モルガニー、ボンネット、ビール、グブレル氏等アリ。

幼蟲ノ運命。　幼蟲ハ尿ヨリ體外ニ排泄セラルルノ外、林氏ハ肺ヨリモ排泄セラルルコトヲ證セリ。卽チ肺ニ於テ少ナクトモ著明ノ出血竈ヲ認メザルニ肺胞及ビ氣管支腔ニハ少量ノ赤血球ト、少數ノ幼蟲トヲ發見シ、臨牀的ニ喀血中ニ幼蟲ヲ證明セシハ山根氏等ノ少數ノ例ニ過ギザレドモ、前述ノ如ク、極メテ多數ノ幼蟲ヲ肺血管內ニ含ムヲ見レバ、僅微ノ出血ニヨリ容易ニ幼蟲ノ肺胞內ニ排出サルベキハ明カナリト云ヘリ。

幼蟲檢出法。　尿ナレバ遠心器ニ掛ケテ沈渣ヨリ、又血液ナレバ夜間、殊ニ十二時ニ近ク耳垂、又ハ指頭ニ小切開ヲ加ヘ、流出スル血液ノ一滴ヲ載物硝子上ニ採リ、被覆硝子ヲ以テ覆ヒ、直チニ乾燥裝置ヲ以テ檢鏡スルトキハ、盛ニ活動セル透明ナル仔蟲ヲ見ルベシ。

永久標本トナサムニハマンソン、ナビアス及ビサブラツェス、コーレル、田中氏等ノ諸方法アレドモ前述ノ如クシテ血液ノ一滴ヲ載物硝子ニ採リ、被覆硝子ヲ以テ平等ニ塗附シ、空氣中ニテ乾燥シ、水漬シテ血球溶解ヲ起サシメテ、無色トナルヲ度トシ、再ビ空氣中ニ乾燥シ、火焰、又ハ無水アルコホル」ヲ以テ固定ヲ行ヒ、普通色素ヲ以テ染色シ、「バルサム」ヲ以テ封ズベシ。予ノ經驗ニヨレバ血滴ヲ被覆硝子ヲ以テ平等ナラシムルコトナク、前述ノ處置ヲ行ヒ、却テ發見ニ容易ナルト、幼蟲ヲ失フコトナクシテ好結果ヲ得タリ。

症狀。　尿ハ日ニヨリテ變化アリ。又一日中ニテモ晝間、夜間ニヨリ差アリ。然シ、概シテ夜間ニ於テ溷濁强度ナルガ如シ。

一、尿ハ米泔汁樣ヨリ牛乳樣ニ溷濁シ、時ニ寒天樣凝塊ヲ混ズルコトアリ。勿論、血液乳糜尿ハ赤色ヲ帶ブ。遠心器ニ掛クルモ透明層ヲ析出スルコトナシ。

二、尿反應ハ弱酸性、又ハ「アルカリ性。

三、尿量ハ普通。

四、脂肪含量ハ一%以下ナレドモ一—二%ニ及ベル報告モアリ、食物ノ脂肪含量ニ關スル勿論ナリ。

五、蛋白質ハ含量、比較的、多キコト特徴ニシテ「アルブミン」、「グロブリン」、「ヘミアルブミン」トシテ含有ス。

六、尿圓柱ハ少ナキカ又ハ含量セズ。故ニ圓柱必ズシモ蛋白質ニ伴ハザルヲ知ルベシ。

七、尿ハ勞働、食物、殊ニ脂肪攝取後寒暖ニヨリ乳糜含量增加スルコトアリ。

八、尿ニ糖ヲ含有セズ。

九、尿ハ檢鏡的ニハ脂肪球、赤血球、白血球、「フィラリヤ」ヲ認ム。

十、腎臟部、會陰部、陰囊ニ疼痛ヲ覺ユルコトアリ。

十一、寄生性ハ多ク「フィラリヤ」性熱ヲ有ス。

十二、下腿、陰囊等ノ皮膚肥厚、又ハ象皮病ヲ伴フコトアリ。

豫後。　不良ナラザルモノノ如ク、乳糜尿ノ突然消失スルコトアリ。又「フィラリヤ」帶蟲者ニシテ無症狀ニ經過スルモノ多ク、六〇—七〇歲ノ高齡ニ達スル者アリ。卽チ乳糜尿ハ生命上ニ大ナル危險ノ伴ハザルモノノ如シ。然レドモ治療上、之レヲ根治セシムルハ蓋シ、容易ニ非ズ。

療法。　本症ノ療法ニ就キテハ諸家ノ實驗報告枚擧ニ暇ナク多種多樣ノ藥劑擧ゲラレタリ。之本症ノ難治ナルヲ證スルニ足ラムカ。

從來用ヒラレシハ、沃度加里、白檀油、「チモール」、「テルペンチン油、「アトキシール」、「ヒニン」、「グリセリン」、亞砒酸注射等用ヒラレタルモ奏効確實ナラズ。福田、衣川氏等ハ一%食鹽水ヲ多量ニ(三〇〇·〇—一〇〇〇·〇)注射シ、又昇汞水ノ靜脈內注射等ヲ行ヘルモ無効ナリシヲ報ジ。フィント氏ハ「メチレン青」ヲ、ショイペ氏ハ「ピクリン酸

加里ヲ、又或ル人ハ「スチプチチン錠ヲ以テ有効ナリトセリ。近時ニ至リ「サルバルサン」注射ヲ用ユルニ至リシガ、多少ノ効果ヲ齎スガ如ク、武藤、梅津、笹岡、土肥(章)、山田及ビ余ノ一例ニ於テハ尿ノ處見上ニハ良効アリシガ如ケレドモ、依然トシテ血液中ニ「フィラリヤ」ヲ證明セル例多ク、又再發セルモノ、全然無効ナリシモノモアリキ。最近入澤氏ハ「ピクリン酸二・〇ヲ六〇丸トナシ、一日五粒宛用ヒ、日ニ二粒宛ヲ增加シ、同時ニ鹽酸ヒニン」〇・五ヲ併用シ、治効ヲ收メ。又西村氏ハ四%ノ鹽酸エメチン」一・〇皮下注射ヲ行ヒ、尿ハ透明トナリシガ「フィラリヤ」ハ消失セザリキ。又ローゲル氏ハ本年可溶性アンチモニー」ノ靜脈內注射ヲ以テ著効ヲ收メタルヲ報ジ。次デ宮路氏ハ二%酒石酸アンチモンナトリウム」ノ靜脈內注射ヲ推稱セリ。

實驗例

余ハ我金澤病院皮膚科外來患者、大正二年一月ヨリ同九年十一月三十日迄一七二五一人中、乳糜尿及ビ血液乳糜尿合計三十例ヲ得テ、中一例ノ寄生乳糜尿ニ就テ詳細ニ觀察セル点ヲ次ニ記載スベシ。

若泉某、二十七歲、男、農、福井縣今立郡產。(大正九年九月一日初診)

診斷、　乳糜尿。

主訴、　尿閉、四肢末端冷感及ビ全身衰弱。

現病歷、　本年春二回、尿ニ乳樣白濁ヲ起シ、朝起時、尿閉アリ、醫ニヨリテ導尿ヲ受ケタレモ、奏効十分ナラズ、自ラ腹壓ニヨリ小指頭大ノ寒天樣凝塊ヲ壓出シ、放尿スルヲ得タリ。後小康ヲ得シガ、八月七日ニ至リ、再ビ白濁及ビ朝起時尿閉ヲ起シ、再ビ醫ニヨリ導尿ヲ受ケシモ無効ニシテ腹壓ニヨリ前述ノ如ク凝塊ヲ壓出シ、漸次透明尿ヲ出スニ至レリ。其後一週間ニシテ再ビ同樣ノ發作起レリト云フ。

現症、　體格中等、榮養良、皮膚蒼白色、左肺尖加答兒、他ニ異常ナシ脾ヲ觸レズ。酒、煙草ヲ好ミ、花柳病ヲ否定スレモ、ワ氏反應强陽性ナリキ。

尿ノ處見、　淡黃色微濁ニシテ、寒天樣凝塊ヲ器底ニ見遠心器ニ掛クルモ透明層ヲ析出セズ「エーテル」ヲ加ヘ振盪スルモ透明度ニ變化ヲ見ズ。弱「アルカリ性ヲ呈シ、蛋白ヲ多量ニ含ミ、エスバツハ氏三%、比重一・〇二六、糖ヲ含有セズ。檢鏡上、脂肪球多數、細菌及ビ「チリンデル」ヲ見ズ。赤血球、上皮、粘液ヲ少量ニ認メ數枚ノ標本中一枚ニ「フィラリヤ」ヲ見ルヲ得、又夜十二時血液中ヨリモ「フィラリヤ幼虫ヲ証明スルヲ得タリ。

既往症、　痲疹ヲ經過セザルガ如ク、小兒時代ヨリ年々「マラリヤ」發作アリ。一時七八年間、醫治ニヨリ治セシガ十七八歲頃ヨリ再ビ發作ヲ見ルニ至レリ。爾來年々發作アリ。十年前鼠蹊ヘルニア」ヲ起セシガ治セリト云フ。生來胃腸健ナラズ。

療法、　先ヅ患者ハワ氏反應强陽性ナリシヲ以テ「フィラリヤ症ニモ

從來有効ナリトセラル、「サルバルサン」ヲ用ユルコト、シ。

第一回、「アルサミノール」〇・三ヲ稀釋、注入セリ、爾後、沃度加里ノ内服及ビ地方醫ニヨリ水銀劑ノ注射ヲウケタリ。

然ルニ注射後、尿ノ溷濁頓ニ減少シ、凝塊ヲ作ルコトナキニ至レリ、但シ其ノ間菜食ヲ主トセリ。

第二回、(第一回注射後一週間)(第一日)尿比重一・〇二四、蛋白質(エスバッハ氏)〇・六%、色ハ朝ハ淡黄色微濁、白血球脂肪球ヲ少數ニ見「フィラリヤ幼虫ヲ見ルヲ得タリ。夕ハ更ニ溷濁增强セリ。患者ノ言ニヨレバ從來安靜ナル時ハ却テ溷濁强シト。午後「アルサミノール」〇・四稀釋注射、夜九時、血液中ニ「フィラリヤ」ヲ發見セズ。之時間ノ早カリシニヨラム。

(第二日)朝昨夕ヨリ溷濁强ク、帶赤黄色ヲ呈ス。

(第三日)朝比重一・〇二〇蛋白質六%尿中ニ幼虫ヲ証ス。

第三回、(第二回注射後九日目)(第一日)

來院スル途中人車、汽車ニテ動搖セル爲メカ、再ビ左右副睾丸、腫脹セシガ、入院後安靜ヲ守リシニ縮小セリト云フ。觸ルルニ左右、殊ニ右ノ副睾丸拇指頭大ニ腫脹シ壓痛アリ。

尿ハ比重一・〇二三色淡黄ニシテ稍々溷濁シ、小指頭大ノ凝塊ニヨリ尿閉ヲ起シタリシガ腹壓ニヨリ壓出スルヲ得タリ。「フィラリヤ」ヲ見ズ。第二回注射後牛乳三合宛ヲ飲用セリト依テ、食事性ト尿溷濁度トノ間ニ何等カノ關係ナキヤヲ檢セムトシ、牛乳ノ飲用ヲ命ゼシガ患者承知セズ。

(第二日)尿ハ溷濁强ク牛乳樣ナリ。蛋白質八%「フィラリヤ」陰性、午後「アルサミノール」〇・四注射ス、夜十二時血液中ニ多數ノ「フィラリヤ」ヲ証明セリ。又患者ノ希望ニヨリ同人妻ノ血液ヲ檢シタルモ陰性ナリキ。

第四回、(第三回注射後十日)「アルサミノール」〇・四注射ス。

尿ハ全ク透明ノ外觀ヲ呈セリ。

第五回、(第四回注射後十日)

(第一日)尿ハ依然トシテ透明、蛋白〇・八%ニ激減セリ。

午後「アルサミノール」〇・五注射夜血液中ニ「フィラリヤ」ヲ多數ニ証スルヲ得タリ。

(第二日)尿ハ稍々溷濁シ纖狀ノ凝塊ヲ見、蛋白九%ニ激增セリ。

(第三日)異常ナシ。全身關節ニ疼痛ヲ訴フ。

(第四日)尿ヲ見ルニ稍々溷濁セリ。

第六回、(第五回注射後十日)

(第一日)尿ハ稍々溷濁セリ。午後「アルサミノール」〇・五注射ス。

(第二日)尿ハ溷濁强クシテ、尿閉アリ。

第二例

米林某、三十九歳、男、農、石川縣石川郡産。(大正九年十一月十日初診)

診斷、血液乳糜尿及ビ陰囊水腫。

主訴、赤色尿及ビ尿閉。

現病歴、約一ケ月前、朝起時、突然尿閉ヲ起シ、某醫ニヨリ導尿ヲウケシニ凝塊アル赤色尿ヲ出シ、入院六日ニシテ治セズ、依テ治ヲ乞フ。

既往症、生來健、十年前「マラリヤ」ニ罹リテ後、右睾丸腫脹セシガ、次デ左右交代性ニ腫脹セリ。二年前肋膜肺炎ニ罹レリ。花柳病ヲ否定ス。

下腿陰囊等ノ腫脹セルコトナシ。

現症、體格榮養中等、左睾丸彈力性ニ腫脹シ、鷄卵大ヲナス。

尿ハ「コーヒー」樣ニ溷濁セシガ沃度加里ノ内服、數日ニシテ淡黄透明トナリ、蛋白質及ビ糖ヲ証セズ、又「フィラリヤ」幼虫モ証明セラレズ。本例ハ詳細ナル觀察ヲ遂ゲラレザリシハ甚ダ遺憾トスル所ナリ。

以上二例ニ於テ左記ノ點ハ注意セラル。

一、乳糜尿ヲ間歇性ニ起セルコト。
一、夜間ニ尿、溷濁度増強シ、朝起時尿閉ヲ起セルコト。
一、尿ノ溷濁度ト含蛋白量トガ約比例ス。
一、副睾丸炎ヲ起セルコト、淋疾ヲ有セザルヨリ見レバ「フィラリヤ」ト關係アラムカ。

一、「マラリヤ」ヲ經過セルコト。
一、「サルバルザン」注射及ビ沃度加里ノ併用ニヨリ第一例ノ尿ノ處見ハ輕快セル如ケレモ、恰モ乳糜尿ノ間歇時ニ相當セルヤモ計ラレズ。但シ「フィラリヤ」ノ消失ニ向ツテハ何等ノ効果ヲ齎ラサザリシコトハ明カナリ。第二例ニ於テハ沃度加里奏効セル如シ。

余ハ大正二年一月ヨリ同九年十一月卅日迄、金澤病院皮膚科外來患者、一七二五一人中、三〇例（〇・一七三%）ヲ得テ、左ノ如キ觀察ヲナセリ。只惜ムラクハ、檢血ノ例極メテ稀有ニシテ寄生性ナリヤヲ分ツ能ハズ從テ地方的關係モ價値少ナキモノナリ。

姓名	住所	年齢	職業	性	尿蛋白	尿中ニ於ケル糖	尿中ノ「フィラリヤ」ニ於ケル血液	尿中ニ於ケル凝塊アルモノ	尿閉	尿溷濁ト溫度トノ關係	尿溷濁ト食物トノ關係	尿溷濁ト勞働トノ關係	尿溷濁ト晝夜トノ關係	血液中ノ「フィラリヤ」	「サルバルサン」注射	沃度加里内服	膀胱洗滌	合併症	ツヂ氏反應	ビルケ氏反應	經過
酒井	東彌波郡	二九	農	男	(−)	(十)	(−)	(十)	(十)					(−)		(十)					
角出	江沼郡	二四	農	男				(十)	(−)	(十)寒冷ニヨリ増強		(十)勞後増強		(十)		(十)		筋炎			
川尻	能美郡	四二	獸醫	男				(十)	(十)							(十)					
木下	河北郡	一九	大工	男				(十)	(十)	(十)						(十)					
山原	鳳至郡	四六	農	男	(−)	(−)	(−)	(十)				(十)勞後増強						副睾丸炎		ビルケ氏反應	輕快
大形	鳳至郡	二八	農	男	(十)	(−)		(十)	(十)	(十)		(十)勞後増強			(十)（三回）	(十)		膀胱結石	(土)		
中村（一）	丹生郡	四一	理髮	男									午後増強			(十)		脊髓痨濕疹	(卅)		
中村（吉）	能美郡	六五	農	男	(十)一、%			(十)		(十)					(十)（二回）	(十)	(十)				

中根	涌波	山川	利川	北島	大幸	奥出	元	東	奥田	村田	山口	都地	高橋	舘
珠洲郡	金澤市	坂井郡	吉田郡	江沼郡	丹生郡	鵜來町	石川郡	江沼郡	能美郡	富山市	西礪波郡	大野郡	江沼郡	石川郡
一八	一九	六八	三四	三三	五九	六二	三六	二五	四九	四二	三八	四一	三九	六三
織物	商人	農	農	農	生絲商	薪炭	農	農	工夫	銀行員	農	農	無	農
男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男	男
			(十)		(十)					(一)	(十)			
			(一)		(十)					(一)				
						(一)								
	(十)			(十)		(十)			(十)	(十)		(十)	(十)	(十)
(十)	(十)	(十)	(十)	(十)	(十)	(十)			(十)				(十)	
(十)			(十)	(一)	(一)	(一)	(十)		(十)		(十)		(十)	
				(十)寒冷ニヨリ増強						(十)寒冷ニヨリ増強				
				(十)肪脂食後増強	(十)飲酒後増強				(十)鯡食後					
			(十)夜増強											
			(十)		(一)	(一)								
		(十)(二回)	(十)(三回)							(十)(一回)	(十)(二回)			
(十)		(十)	(十)		(十)		(十)	(十)		(十)	(十)	(十)		
													(十)	
	肋膜炎		副睾丸炎						鼠蹊腺炎				腎盂炎 膀胱炎	膀胱炎
		(一)	(一)	(土)	(一)	(一)				(一)			(一)	
										(十)			(一)	
					透明尿									

守護	高岡市	二七	銅器	男													
前川	大野郡	四三	農	男		(一)	(一)		(十)	(十)		(十)牛乳飲用後増強		(十)午前中増強		(十)(一回)				肺尖カタル			
關戸	能美郡	二九	農	男																黴毒	(卅)		輕快
谷内		三一	農	男																副睾丸炎 黴毒	(卅)		
藤井	大野郡	三九	勞働者	男	(十)	(十)			(十)	(十)							(十)			尿道炎 陰嚢水腫			
米林	石川郡	三〇	農	男	(一)	(一)	(一)	(十)	(十)	(十)	(一)	(土)	(十)勞後増強	(十)夜間増強			(十)	(一)		陰嚢水腫	(一)		全治
若泉	今立郡	二七	農	男	(十)	(一)	(十)	(一)	(十)	(十)	(一)	(一)	(一)	(十)夜間増強	(十)	(十)(六回)	(十)	(一)		肺尖カタル 副睾丸炎	(卅)		輕快

地方的關係。　村落地方ニ多キヲ、推知スルヲ得ベシ。之ヲ郡別ニセバ、能美郡四例、江沼郡四例、大野郡三例、石川郡三例、鳳至郡二例、丹生郡二例、東礪波郡、西礪波郡、河北郡、坂井郡、珠洲郡、今立郡、吉田郡各一例市街地トシテハ金澤市、富山市、高岡市、鶴來町各一例ナリ。

年齡的關係。　二一歳ヨリ五〇歳迄ノ壯年者ニ多キヲ見タリ。年齡別ニセバ左ノ如シ。

一五歳―二〇歳……三例、　二一歳―三〇歳……八例
三一歳―四〇歳……七例、　四一歳―五〇歳……七例
五一歳―六〇歳……一例、　六一歳―七〇歳……四例

職業的關係。　農ニ於テ極メテ多數ナルヲ示シ。六〇％ヲ占ム。職業別ニセバ左ノ如シ。

農業一八例。獸醫、大工、理髮師、無職、銀行員、工夫、薪炭商、生絲商、商人、織物業、銅器商、勞働者、各一例。

性的關係。　凡テ男子ナリ。

尿所見。

一、蛋白質ヲ含有セル者七例、陰性四例、不明十九例。

一、糖ヲ含有セル者三例、陰性七例、不明廿例。

一、尿中ニ「フィラリヤ」ヲ證明セル者一例、陰性五例、不明廿四例。

一、尿中ニ血液ヲ含有セル者十二例、陰性二例、不明十六例。

一、尿中ニ凝塊アル者十七例、不明十三例。

一、尿閉ヲ起セル者十五例、陰性四例、不明十一例。

尿溷濁度ト温度トノ關係。　寒冷ニヨリ溷濁度ヲ増加スル者三例、温度トノ關係ヲ認メザル者二例、不明廿五例。

尿溷濁度ト食物トノ關係。　飲酒ニヨリ溷濁度増強スル者一例、鯡ノ食後増強スル者一例、牛乳飲用後増強スル者一例アリ。

尿溷濁度ト勞働トノ關係。　勞働ニヨリ溷濁度ヲ増ス者四例アリ。一例ハ斯ルコトナク、他ノ廿五例ハ不明。

尿溷濁度ト晝夜トノ關係。　午後ニ溷濁増ス者一例、午前ニ増強スル者一例、夜間ニ増強スル者三例アリ。一般ニ夜間ニ増強スルコトハ成書ニ記スル所ナリ。不明廿五例。

血液中ニ「フィラリヤ」ヲ證明セル者。　三例ニ證明シ、三例ニ陰性ニシテ不明廿四例。

合併症。　副睾丸炎ノ多キハ成書ニ注意セラレタル處ニ一致シ、象皮病ヲ伴ヘル者ナキハ注意スベシ。

副睾丸炎四例、陰嚢水腫二例、鼠蹊腺腫一例、膀胱炎一例、膀胱結石一例、肋膜炎一例、肺尖加答兒二例、筋炎一例ナリ。

ワ氏反應。　陽性六例中、臨牀上黴毒ヲ證明セシ者三例ニシテ殊ニ余ノ一例ハ強陽性ナリシニモ拘ハラズ、黴毒ノ既往症ナク、臨牀上ニ亦之ヲ認メズ。患者ハ高度ノ神經質ナリキ。本症ト患者ノ有セシ「マラリヤ」ト何等カノ關係ナ

キカ。ワ氏反應陰性者七例。

治療的關係。「サルバルサン」注射ヲナセル例八ニシテ中輕快セル者二例アリ。沃度加里內服セル者十九例中、輕快セル者二例、全治一例、不明十六例ナリ。而シテ余ノ一例ハ「サルバルサン」注射六回ニ及ビ尿ハ透明トナリシガ、時々溷濁シ尚血液中ニ「フィラリヤ」ヲ證明セリ。他ニモ斯ル報告例アリ。

膀胱洗滌ハ二例ニ於テ行ハレ、輕快セル者一例アリ。

而シテ、之レヲ九州醫科大學皮膚科教室統計ニ就テ見ルニ、

九州醫科大學皮膚科教室統計乳糜尿

年號	外來患者數	乳糜尿	男	女	百分比	年齡
明治四十四年	三三〇四	六	五	一	〇・七四%	二六歲—五五歲
同 四十五年	三五三八	四	四	〇	〇・四〇%	二六—五五
大正二年	四二八七	一〇	九	一	〇・八五%	一六—四五
同 三年	四二六七	二	一	一	〇・二二%	三一—四五
同 四年	四四七三	一一	一〇	一	一・一〇%	一六—五九

總括

以上ヲ總括セバ。

一、女子ニ極メテ少數ナルハ種々ノ事情ニヨリ、醫ヲ訪ハザル者多キト、他科ヲ訪フ者モアルニ因ラム。

一、壯年者ニ多シ。

一、都市ニ少ナク村落ニ多シ。

一、農業者ニ最多ニシテ、六〇%ニ當レリ。

一、尿ノ溷濁度ハ寒暖、身體過勞、食物性質、晝夜ニヨリテ變化アルモノノ如シ。

一、未ダ療法ノ確定セルモノナシ。

一、蛋白含量ハ極メテ動搖シ易クシテ尿ノ溷濁度ニ略々、比例スルガ如シ。

一、「サルバルサン」注射ハ「フィラリヤ」ノ消失ニ對シテハ何等ノ偉力ナキガ如シ。

一、尿ニ寒天樣凝塊ヲ生ジ、又尿閉ヲ起セル者多シ。

終リニ臨ミ、恩師土肥博士ハ予ニ本問題ノ調査ヲ命ゼラレ終始懇篤ナル御示導ト御高閲ノ勞ヲ賜ハリシヲ謝シ、併テ先輩、同僚諸氏ノ深甚ナル御同情ヲ鳴謝ス。

引用書目

1) **Mannabery,** Handbuch der Urologie. 1906.　2) **Scheube,** Die Krankheiten der wärmen Länder. 1903.　3) **Aschoff,** Pathologische Anatomie. 1919.　4) **Waldvogel,** Beitrag zur Lehre von der Chylurie. Deutsche Arch. Bd. 74.　5) **Lucke,** Über die Chylurie. Münch. med. W. Nr. 26. 1908.　6) **Gravie,** Treatment of filariasis and elephantoid conditions by intravenöse injection of salvarsan. The journ. of tropical med. and hyg. No. 21. 1916.　7) **Spagnolis,** Über einen Fall von Filaria-Elephantiasis in Sizilien. Dermat. W. Bd. 68 Nr. 11. 1919　8) **Cammarata,** Ein autochthonen Fall von Filaria-Elephantiasis in Caltanisetta. Dermat. W. Bd. 69. Nr. 36. 1920.　9) **Port,** Ein Fall von nicht parasitäre Chylurie mit Sektionbefund. Zeitschr. f. klin. Med. Bd. LIX.　10) **Lafforgue,** Die Chylurie. Journ. des pratic. Nr. 9. 1913.　11) **Ceston und Pujol,** Ein Fall von klinostatischer Chylurie. Dermat. W. Bd. 57. 1913.　12) **Bloch,** Chylurie durch endovesikale Operation geheilt. Dermat. W. Bd. 58. Nr. 24. 1914.　13) **King,** Ein in Devonsehire beobachteter Fall von Filariasis. Brit. med. J. Mai. 1913.　14) **田中友治**、「フィラリア」ニヨリ血乳糜尿ノ一例、皮膚科泌尿器科雜誌、第三卷、明治三十六年。　15) **肥田七郎**、「フィラリヤ」成虫ニ就テ、東京醫事新誌、一三四三號。　16) **田中友治**、バンクロフト氏「フィラリヤ病患者ノ腎臟ニ及ボス影響、皮膚科泌尿器科雜誌第七卷、明治四十年。　17) **同**　上、寄生虫（「フィラリヤ」幼虫等）及細菌（プラスモヂウム等）ヲ含有セル血液標本製作ニ於ケル一二新案、同上、同卷。　18) **高橋忠策**、乳糜尿、同上、第八卷、第二號、明治四十一年。　19) **高橋明**、陰囊乳嘴狀象皮病患者附「フィラリヤ」幼虫、同上、第八卷、第十一號、明治四十一年。　20) **馬場貞次**、「フィラリヤ、サングイニス、ホミニス」供覽、同上、第十二卷、第六號、明治四十五年。　21) **高橋明**、象皮病ト「フィラリヤ」トノ原因的關係及ビ其組織的研究、同上、第十二卷、第七卷、明治四十五年。　22) **笹岡芳明**、血乳糜尿ノ療法、同上、第四卷、第六號、明治三十九年。　23) **望月代次**、乳糜尿ニ關スル血液變化ニ就テ、同上、第十五卷、第二號、

大正四年。

24) **桂田富士郎**、「フィラリヤ」寄生ノ人體ニ對スル意義ニ就テ、岡山醫學會雜誌、第二九五號。

25) **殿村種夫**、沖繩縣下及ビ鹿兒島縣下ニ於ケル象皮病及ビ「フィラリヤ病ニ就テ、皮膚科泌尿醫科雜誌、第十八卷、第七號、大正七年。

26) **山田孝太郎**、乳糜尿ニ「アルザミノール」注射ニ就テ、同上、第十七卷、第三號、大正六年。

27) **梅津小次郎**、「アルサミノール」注射ニヨリ治セル「フィラリヤ、ザングイニス、ホミニス」ノ一例、同上、第十七卷、第十一號、大正六年。

28) **山田孝太郎**、血乳糜尿ニ「アルサミノール」ヲ注射セル一例、同上、第十七卷、第十一號、大正六年。

29) **泥谷貞幹**、「フィラリヤ性象皮病ノ二例、同上、第十七卷、第一號、大正六年。

30) **衣川和一**、乳糜尿ノ治驗豫報、同上、第八卷、第二號、明治四十一年。

31) **林鄙彦**、「フィラリヤ」ノ體內分布狀態並ニ「フィラリヤ症ノ病理解剖、中外醫事新報、六五八號。

32) **吉永福太郎**、熊本縣下天草島ニ於ケル「フィラリヤ虫及ビ象皮病ノ研究、同上、第七七四號。

33) **吾河史郎**、「フィラリヤ仔虫ノ定期移動現象ニ關スル疑義ニ就テ、同上、第九百一〇號。

34) **不破格**、石川縣下ニ於ケル象皮病調査報告、同上、第八百〇九號。

35) **菅沼淸次郎**、「フィラリヤ病ノ症候學的補遺、同上、第九三二、第九三三、九三四號。

36) **田中友治**、「フィラリヤ病症ニ就テ、同上、第七二二號。

37) **松村虎之助**、陰囊乳糜腫ニ就テ、好生館醫事研究會雜誌、第十七卷、第一號。

38) **武藤、板津**、乳糜尿ニ六百六號ノ應用、醫學中央雜誌第八卷、第九號。

39) **望月、井上**、象皮病ノ原因ニ就テ、同上、第九卷、第十六號。

40) **宮川米次**、日本住血吸虫ノ皮膚ヨリ門脈系統ニ入ル經路並ニ該幼虫ノ感染當時ニ於ケル形態ニ就テ、東京醫事新誌、第一七三六號。

41) **山本有成**、血中ノ「フィラリヤ、ザングイニス、ホミニス」ノ實驗ニ就テ、同上、第三一九六號。

42) **辻廣**、「フィラリヤ虫ニ因スル二三ノ疾患、實驗醫報、第五年、第五六號。

43) **入澤達吉**、血乳糜尿症、同上、第四年、第四六號。

44) **河田直吉**、「フィラリヤ性精系炎ノ一例、近世醫學、第二卷、第七號。

45) **森武美**、「フィラリヤ」ニ因スル海綿樣淋巴腺腫ニ就テ、臺灣醫事研究會雜誌、第百五五號。

46) **藤井靜英**、沖繩縣下ニ於ケル小兒絲狀虫病統計的並ニ臨床的觀察附象皮病、小兒科雜誌、第百八八號。

47) **西村正治**、「フィラリヤ性血乳糜尿ノ一例、北越醫學會雜誌、第三二卷、第三號。

48) **佐野實**、乳糜尿中ノ脂肪體ニ就テ、東北醫學會誌、第二卷、第二號。

49) **赤岩八郎**、乳糜血尿症ニ於ケル腎機能ニ就テ日本外科學會雜誌、第四卷、第一號。

50) **木村哲二**、「フィラリヤ症ノ一例、醫事新聞、第一〇二四號。

51) **山本、山田**、「フィラリヤ幼虫(バンクロフト氏)ガ表在性血管ニ夜間出現スル原因ニ就テノ補遺、東京醫學會雜誌、第三〇卷、第八號。

52) **吉村良雄**、山梨縣下ニ於ケル「フィラリヤ虫蔓延ニ就テ、日本內科學會雜誌、第一卷、第四號。

53) **望月代次**、鹿兒島縣種子ケ島及ビ曾瓦島並ニ沖繩縣ニ於ケル象皮病原因調査報告日本內科學會雜誌、第一卷、第四號。

54) **吉永福太郎**、鹿兒島縣下ニ於ケル大島、種子島ニ於ケル「フィラリヤ虫携帶者ニ就テ、同上、第一卷、第四號。

55) **帖佐彦四郎**、象皮病豫防接種成績報告、同上、第一卷、第四號。

56) **松下禎二**、象皮病ノ原因及ビ「フィラリヤ虫ニ關スル討論、同上、第一卷、第四號。

57) **松崎春一郎**、住血絲狀虫病(乳糜尿)ノ「イマミコール」療法、治療新報、第一五一號。

58) **金原庄次郎**、靜岡縣下「フィラリヤ病流行概況、靜岡縣醫學會々報、第四九號。

59) **竹中源一**、第六次派遣大隊下士卒人血絲狀虫保有者、中央醫學、第一六卷、第十號。

60) **武內、原口**、「フィラリヤ、ザングイニス、ホミニス」ガ皮膚表在血管ニ夜間ニ發現スル原因ニ就テ、研瑤會雜誌、第百三八

號。　61) 吉永、帖佐、八丈島ニ於ケル象皮病ノ原因ニ就テ、京都醫學會雜誌、第八卷、第一號。　62) 同　上、象皮病豫防接種法第二回報告、同上、第八卷、第三號。　63) 同　上、象皮病豫防接種法第三回報告、同上、第九卷、第一號。　64) 山本有成、血中ノ「フィラリヤ、ザングイニス、ホミニス」ノ實驗ニ就テ、東京醫事新誌、第三一九六號。　65) 溝上定男、「フィラリヤ虫」ノ檢出法ニ就テ、軍醫團雜誌、第四十一號。　66) 神岡虎治、「フィラリヤ」ノ種類、乳糜尿及ビ其療法、同上、明治四十年、第一六〇號。　67) 陸軍醫務局、日本ニ於ケル「フィラリヤ」ノ分布軍醫學會雜誌、大正二年、第四十一號。　68) 牟田熊彦、「アトキシール」ヲ以テ治癒セル「フィラリヤ」病ノ一例、岡山醫學會雜誌、第二七九號。